

縄文時代の雪国の暮らし

岡田康博

OKADA Yasuhiro

青森県教育庁文化財保護課/
三内丸山遺跡対策室



1— 変わる縄文文化のイメージ

小学生の頃、原始人の家族を描いた漫画があった。遠くで火山が噴火し、毛皮のパンツをはいた少年がマンモスを追いかけて回す場面が印象的であった。それと同じように、我々の先祖は髪や髭を伸ばし毛皮を着て、弓矢を手に野山を駆け巡って獲物を追い求め、貝や木の実を集め自給自足の生活を送っていた。土器を作り、半地下式の薄暗い堅穴住居に住み、食料を求め移動を繰り返す原始的な生活といったことが縄文文化についての一般的なイメージであろう。しかし、全国各地の遺跡の発掘調査によって縄文文化の解明が進み、優れた技術と豊かな精神世界を持ち、想像以上の成熟した社会であったと考えられるようになってきた。

2— 縄文遺跡の宝庫

現在、日本には約44万箇所の遺跡がある。遺跡は旧石器時代から近・現代まで各時代のものであり、そのうち約5万箇所が縄文時代の遺跡である。日本列島の北から南まで普遍的に所在するが、通常は地下に埋もれており、その内容がよくわかっていない場合やその存在さえも知られていないことがある。そして、全国では毎年7,000件を超える発掘調査が行われている。これらの発掘調査の大部分は何らかの開発行為に先立つもので、発掘調査が終了するとその遺跡は工事によってなくなってしまう場合がほとんどである。数多くの発掘調査の中には歴史観や定説を変えるといったものも少なくなく、特に文字や文献のない時代については、発掘調査が日本や地域の歴史を明らかにすることができる唯一の方法である。

3— 縄文文化とは

氷河期が終わり温暖化が進む中で、石器を主な道具としていた旧石器時代が終わり、約1万3000年前に縄文時代が始まった。そして日本列島で本格的な稲作が始まる弥生時代までの約1万年間継続した。その時代に営まれた文化を縄文文化と呼ぶ。新たに土器が発明され、「煮る」ことや貯蔵も容易となった。そのため自然の恵みをより広く利用できることになり、食生活の安定をもたらした。煮沸することによって衛生状態も改善されたことだろう。また、弓矢が登場し、遠くから安全に獲物をしとめること

ができるようになった。海に育まれた豊かさを得るための漁労具の開発も急速に進んだ。犬が飼われ、植物の栽培も行われるようになり、ムラも出現した。大規模な記念物である環状列石(ストーンサークル)のようなまつりの施設も登場した。そして移動から定住へと、生活の基本的なスタイルが大きく変化した時代でもある。

4— 縄文人の姿

全国で出土した縄文人骨の研究から縄文人の姿が少しずつ明らかになってきている。平均身長は男性で157cm、女性はそれより10cmほど小柄で、筋肉質の体をしていて、平均死亡年齢は約30才で、出産の開始が大体14～5才であった。顔は彫りが深く二重瞼で、縄文人的な顔立ちには吉永小百合さんタイプとされている。骨折やガンの事例があるが結核はない。また縄文人には虫歯があり、植物質の食料を大量に摂取し始め、以前に比べて食生活が変化したことが考えられている。寄生虫である鞭虫の卵も大量に出土しており、腹痛に悩まされていたらしい。関節の変形から、しゃがむ^{そんまよ}姿勢が多かったことが推測されている。脳の容量は現代人とほとんど変わらず、言語による意志の伝達は当然あったと考えられている。

日本列島においては大陸や朝鮮半島からの渡来人はあっても人種の交替といった歴史的大事件はなかったとされていることから、縄文人は現代人の直接の祖先であり、縄文文化の上に現代生活が成り立っていると言っても過言ではない。現代生活の中にはその起源を縄文時代まで遡って考えることができるものもあり、縄文文化は日本の基層文化といった表現がされる場合がある。縄文文化は現代と無関係ではなく、最も身近で親しみの持てるものであるが、急速に縄文文化の伝統が失われつつある。未開・未発達という意味で縄文人を原始人と呼ぶのはいかがなものだろうか。



■写真3—イグサ科の植物でできた縄文ボシエット

5— 甦る縄文ムラ

今日、縄文文化が注目され見直されるきっかけとなったのが、本州北端の青森市郊外に所在する三内丸山遺跡の発掘調査である。この遺跡が全国的に注目されたのは平成6年のことであった。県営野球場建設に先立ち、青森県教育委員会が発掘調査を行ったところ、巨大な集落跡が姿を現すと同時に、従来の縄文観を変えるような発見が相次ぎ、青森県は進めていた野球場の建設工事を中止し、遺跡の保存、公開、活用を決めた。平成12年には縄文時代の遺跡としては3件目となる国の特別史跡に指定された。現在は遺跡公園として公開され、年間30万人以上が訪れ、集落の全体像と当時の生活環境を解明するための発掘調査が毎年続けられている。

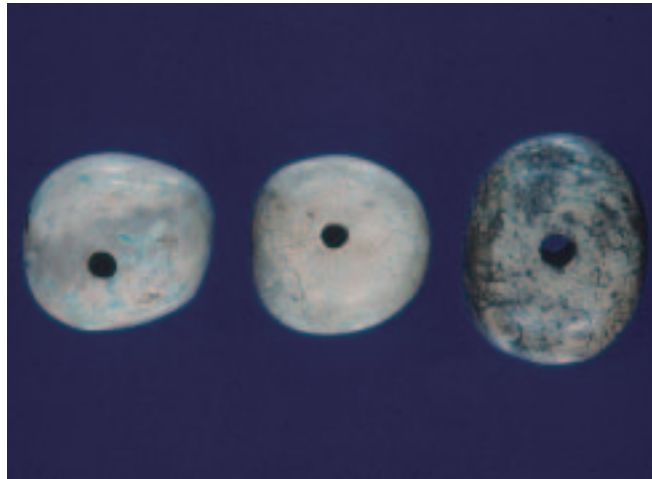
三内丸山遺跡は縄文時代前期中葉から中期末葉(約5500～4000年前)にかけての拠点集落跡である。遺跡の存在は江戸時代から知られてはいたが、遺跡の中心部が本格的に発掘調査されることはほとんどなかった。しかし、平成4年から始まった発掘調査によって、遺跡の全体像が少しずつ判ってきた。まず、規模が非常に大きいことである。東西方向へ420m以上と南北方向へ370m以上延びている道路が2本見つかると、改めて集落の規模が確認された。集落はさまざまな施設で構成され、堅穴住居、平地住居、大型堅穴住居、大人の墓、子どもの墓、捨て場、盛り土、大型高床建物、貯蔵穴、



■写真1—集落の様子(模型)



■写真2—たくさんのお偶



■写真4—新潟産ヒスイ



■写真5—北海道産の黒曜石

粘土採掘穴などが一定の場所に整然と配置された、計画的な集落づくりが行なわれていた。直径1mのクリの巨木を使った高さが20m近くもある大型掘立柱建物や長さ約32mの大型住居が作られていた。このような大型の建築物を作るためには、巨木を運搬できる大勢の人々と作業ができる組織、技術の存在が必要である。

ゴミ捨て場からは当時の人々の食生活を示す動物や魚の骨、木の実などが大量に出土し、北の大地の豊かさを物語っている。ブリ・サバ・アジ・マダイ・ヒラメなど陸奥湾内で獲れる魚の他に、時には津軽海峡へ出掛けマグロも獲っていた。木の実ではクリ・クルミが多い。まとも出土したニワトコは発酵酒の原料であった可能性がある。またヒョウタン・ゴボウ・アサなどの栽培植物の種子が発見され、当時すでに狩猟・採集の他に、自ら食料を栽培し獲得する方法を知っていたことが明らかとなった。しかし、明確な農耕具は出土しておらず、栽培行為が即農耕文化の成立とならなかったことを示している。ひとつの資源に集中することなく多種多様な資源を

利用していたらしい。大量に出土したクリの花粉や実の遺伝子分析から、集落周辺には管理されたクリ林が広がっていた。有用な資源を選択・管理し、常に自然に対して人為的な働きかけを継続した結果、縄文里山とも呼べるような環境や生態系が成立していたことが指摘されている。

ヒスイ・コハク・アスファルト・黒曜石などは遠く離れた産地から持ち込まれた。遠方との交流・交易も活発に行なっており、日本海を舟で往来していた。遠距離に「もの」が動くことによって集落同士のネットワークが整備され、他の文化圏との日常的な交流・交易も定着した。祭祀は頻繁に行われ、集落内の大規模な墓地は祖先に対する強い崇拝を思わせ、継続的に祭祀を行うことによって人々の結びつきを強めていったものと推測され、祭祀が社会的に重要な意味を持っていたらしい。それは集落の大型化や長期間にわたる継続と連動し、集落内の施設の維持管理や縄文社会を支える大きな役目を果たしていたものと考えられる。



■写真6—復元大型住居



■写真7—復元竪穴住居



■写真8—三内丸山遺跡雪景色(大型掘立柱建物)



■写真9—三内丸山遺跡雪景色(竪穴住居)

6—縄文時代の冬の暮らし

当初温暖な気候であった縄文時代も若干の変動を繰り返しながら寒冷化に向かい、少なくとも三内丸山遺跡が繁栄した時代には現在とあまり変わらず、当然冬には雪が降ったものと考えられる。基本的に同じ場所に通年で暮らす定住生活であり、雪が降ったからと言って温暖な地へ移動することはなく、また、じっと耐え全ての活動が休眠するわけでもなく、雪国なりの生活がそこでは展開していた。

縄文人の冬の活動を考えてみよう。まず、秋から冬にかけては狩りの季節である。木々の葉が落ち、見通しが開けた森は格好の狩り場となる。降雪地帯のためイノシシはおらず、シカも少なかったと思われ、もっぱら狙いを定めたのはノウサギやムササビなどの小動物である。雪上に残されたノウサギの足跡を手掛かりに巣穴を見つけたことだろう。マタギの人々が使うウサギを捕る際の「ワラダ」が見つかる遺跡もある。晴れた日には陸奥湾に出かけ、冬の代表的な味覚であるマガラを捕っていたことが魚骨の出土から判明している。食料も秋に大量に捕れたサケ・クリ・クルミ・山菜などを保存食としていたのであまり心配はなかったはずだ。縄文人の食料の約8割は植物質の食料であり、動物性蛋白質は思っているほど摂取していないことから、森の恵みで十分備えることができた。

防寒対策も心配ない。縄文人の衣服はカラムシなどの植物を利用し編んだもので、その断片が出土している。それらを重ね着したり毛皮を着込むことによって寒さは防げた。アイヌ民族に見られるようなサケの皮を利用した靴などもあったかもしれない。家は地面を掘り下げて造った竪穴住居で、冬は暖かく夏は涼しいとされ、東北アジアに普遍的に見られるものである。掘り上げた土を



■写真10—三内丸山遺跡雪景色

屋根に盛った土屋根も遺跡では確認されている。真冬に、復元した竪穴住居内で火を焚いた実験では、室温が20度以上になることが確認されていることから、室内は意外と暖かかったらしい。また、大型住居は冬期間の共同住宅であったとの説もあり、複数の家族がまとまって居住した可能性もある。秋の豊かな実りに感謝しつつ、疲れを癒すために酒を酌み交わしていたのかもしれない。子ども達にとっても雪上で様々な遊びができる楽しい日々ではなかったのか。

雪が降る日は、炉の近くで弓矢や漁具の手入れをしながら、来るべき春を心待ちにしていたに違いない。冬があつてこそ、春を迎えた喜びが倍增するのだろう。

<参考文献>

- 1) 『縄文の宇宙、弥生の世界』2000 岡田康博・高島忠平 角川出版
- 2) 『遙かなる縄文の声』2000 岡田康博 NHK出版
- 3) 『縄文文化を掘る』2005 岡田康博 NHK出版